



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ユタ州とブリガム・ヤングアメリカ西部開拓史における暴力・性・宗教
Author(s)	櫻井, 義秀
Description	書評
Citation	本のひろば, 14-15
Issue Date	2007-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35233
Type	article
File Information	sakurai-7.pdf



高橋弘『ユタ州とブリガムヤングアメリカ西部開拓史における暴力・性・宗教』新教出版社、2007年、326頁。

北海道大学大学院文学研究科 櫻井義秀

モルモン教は、エホバの証人、統一教会と共に、キリスト教会から長らく異端のキリスト教とみなされ、教義・組織の特異性や脱会者が受けた精神的障害等が指摘されてきた。しかし、モルモン教は、エホバの証人ほどの信者獲得力（日本人信者は二十数万人）や輸血拒否問題、統一教会の靈感商法（1987-2006年までの被害総額約950億円）や合同結婚式といった話題性・社会問題化の契機がなかったために、存在のみ知られた宗教であった。

もちろん、モルモン経の異端的教義を批判する書（ウィリアム・ウッド『モルモン教とキリスト教』いのちのことば社、1975）や、信徒の心理分析等（杉山幸子『新宗教とアイデンティティー回心と癒しの宗教心理学』新曜社、2004）も学術的に行われたりしてきた。

しかしながら、本書によって、初めてモルモン教の実像が日本に伝えられたといっているのではないか。モルモン教の教義と組織的特徴がどのように歴史的に形成されてきたのかが、19世紀後半のアメリカ開拓史と創設者と信者達の群像から詳細に描き出された。

高橋弘氏は、前著『素顔のモルモン教—アメリカ西部の宗教、その成立と展開』（新教出版社、1996）において、初代教祖のジョセフ・スミスがダウジング屋さん（地下水や鉱脈をあてる呪術的技法）から身を起し、3万の宗教コミュニティの長となるも、他の入植者コミュニティとの抗争で1844年に落命するまでの経緯を詳細に描き出した。本書は、二代目教祖（大管長）のブリガム・ヤングが、信者（半数は英国で宣教された移民）をユタに引き連れ、ソルトレークシティにモルモン王国の基盤を作り上げるまでの記述が中心である。スミス同様、ヤングも自らの性的放縦を教説で正当化し、幹部達も神が認めた（教団が信者に強いた）多妻婚をモルモンの教えとして享受する一方、信者には厳格な信仰を強い、違反者には血の贖罪で報いた。また、ユタを通過する開拓民を襲って惨殺し、金品をせしめた（マウンテン・メドゥズ事件）。教団史が隠蔽してきた事柄を歴史資料や研究書を用いて、幹部の行状、ヤングの私兵（ダナイト団）によるリンチ等が克明に記述される。

高橋氏の卓見は、モルモン教をアメリカにおけるキリスト教の特別変異ではなく、19世紀の西部開拓史とアメリカ精神を濃厚に反映した社会集団と捉えたことである。①ユタ等の西部開拓とカリフォルニアの金鉱発見が宗教団体に担われた、②植民者への蛮行をインディアンへの仕業としてアメリカ国民の憎悪を駆り立て、土地奪取の政治的正当化を図った、③選民思想・男性中心主義・暴力による問題解決を文化とした、④孤立主義と排外主義によりコミュニティの結束を図った、⑤宗教集団がビジネス組織に容易に転化し（宗教的コミュニティと政治・経済コミュニティの相互依存）、成功を至福とする等の特徴がある。

実際、性の統制（宗教的原理主義）と暴力（銃の個人的所持と使用）によるコミュニティ形成と維持の文化伝統は現代まで継続している（鈴木透『性と暴力のアメリカ』中央公論新社、2006）。宗教的コミュニティに加入することで（特定の教派や教会に所属）、信用

と面識を確保するという作法は、信頼という社会的基盤を欠いたまま資本主義経済のフロント・ランナーになったアメリカの歴史でこそ理解できる。アメリカでは、宗教以外に、信用調査会社の格付けでしか、個人を図るものさし（成功と破産）がないのである（スコット・A・サンデー『負け組のアメリカ史』（青土社、2007）。他国の人権・民主化の度合いに口うるさいアメリカであるが、モルモン分派の複婚主義者（モルモン教は1890年、ユタの州昇格のために多妻婚を断念）に対して統制をしていない等、19世紀の負の遺産を未だに引きずっていることは注意されてよい。

最後になるが、高橋氏は、評者が初めて大学教員の職を得た短期大学で研究やテニス等を一緒にさせてもらったよい兄貴分であった。このような書評の機会を持てた機縁を喜ぶたい。